慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国国民党第二回全国代表大会をめぐる汪精衛路線と蔣介石路線
Sub Title	Breakup of the Wang Ching-wei Chiang Kai-shek alliance, March, 1925-March, 1926
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.12 (1969. 12) ,p.40- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19691215-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国国民党第二回全国代表大会をめぐる汪精衛路線と蔣介石路線

山田辰雄

一、はじめに
二、汪精衛・蔣介石協力体制の成立と崩壊
三、国民党党路線の発展
四、汪精衛路線
五、蔣介石路線
六、結語

一

本稿は、一九二六年一月の中国国民党第二回全国代表大会（以下国民党二全大会と略す）を中心として、一九二五年三月の孫文の死より、一九二六年三月の中山艦事件にいたる時期を扱う。この時期は、孫文の死によってもたらされた権威の空白のなかから、汪精衛・蔣介石協力のもとに、国民党内に新たな権威が成立し、それが、中山艦事件によって崩壊する過程である。

その後の国民党の発展において、一方で、蔣介石は党内における主流の地位を強化するとともに、他方で、汪精衛は、いわゆる国民党左派の有力な指導者の一人として、武漢政府、改組派、日中戦争中の南京政府を組織し、蔣介石の権力に挑戦した。この意味において、汪精衛と蔣介石の政治路線は、国民党内の二つの主要な潮流を代表しており、両者の協力と対立は、個人的レヴェルにおける権力闘争以上の意味をもつ、と考えることができる。本稿の主要な目的は、汪精衛・蔣介石の協力と対立そのものを分析することではなく、両者の協力と対立をもたらした根底にある革命認識の構造を明らかにすることによって、国民党における、汪と蔣の二つの主要な革命路線の萌芽形態を見出すことである。両者の革命認識の構造を明らかにするための問題点は、汪精衛・蔣介石協力体制の成立と崩壊の過程、および、この間の国民党党路線の発展から導き出されるであろう。

二

汪精衛・蔣介石協力体制の成立と崩壊の過程は、孫文亡きあとの集団指導体制の成立（一九二五年三月―八月）、集団指導体制の崩壊と汪・蔣協力体制の成立（一九二五年八月―一二月）、汪・蔣協力体制の崩壊（一九二六年一月―三月）の三つの時期に分れる。

一九二五年三月一二日の孫文の死は、国民党内の中心的権威の喪失をもたらした。この状況を象徴するかのごとく、孫文に次ぐ地位を競っていた、汪精衛、蔣介石、廖仲愷、胡漢民らの国民党指導者は、全国各地で各々の任務に従事するなかで、孫文の死のニュースに接した。(1)

一九二四年一月の国民党一全大会で採択された、中国国民党党章程第一九条は、総理の地位は、孫文個人のために設けられたものであることを明記しているが、孫文亡きあと彼に代る党最高指導者の地位、および、その選出方法を規定していな

い。しかも、孫文は、彼の後継者を指名しなかつた。したがつて、孫文に代る新たな権威をつくりだすことが、孫文亡きあとの国民党指導者に課せられた重要な課題の一つであつた、と考えても差支えないであろう。

国民党の主要な指導者が、孫文の死後はじめて接触をもつたのは、一九二五年五月八日から一四日にかけて、広東省の潮州と汕頭でおこなわれた会談においてであつた。汪精衛、陳壁君、蔣介石、許崇智、朱培徳、廖仲愷、ガレンのこの会談への参加が確認されているが、[2] これは、党の正式のものではない。会談における注目すべきエピソードの一つは、五月八日に、汪精衛が蔣介石に対して、自らの個人的進退を蔣の一言によつて決めようとしていたことである。[3] このことは、少くとも当面は、党の運営にあたつて両者が協力していくことを意味するとともに、そのことが逆に、自他ともに孫文の有力な後継者の一人と認めつつも、この会談に欠席した胡漢民の処遇に向けられていた、と推測される。なぜなら、広東省における胡漢民兄弟の行動にかんして、これらの党指導者と胡とのあいだに対立が存在していたからである。[4] さらに、この会談におけるもう一つの重要なエピソードは、当時広州周辺を支配していた、楊希閔、劉震寰の反革命勢力の討伐計画であつた。これら指導者は、蔣介石を総指揮に推挙するとともに、汪精衛は、蔣の参謀長職権の行使を要請した。[5] ここにみられるのは、反革命勢力鎮圧にあたつての、党指導者の協力関係である。したがつて、この会談に参集した国民党指導者は、孫文のもつていた個人的・独裁的権威ではなく、集団指導制にもとづいた新たな権威の創出を考慮していたと考えられるであろう。

一九二五年五月下旬に広州で開かれた国民党三中全会は、「民主的集権制」、その具体的形態としての中央執行委員会制採用の方針を明らかにするとともに、前述の党章程第一九条における総理の地位の個人的性格を根拠として、総理の地位の廃止を宣言した。[6] つづいて、六月一五日に開かれた中央委員「全体大会」は、国民党中央執行委員会が「最高機関」であることを承認した。[7]

かくて、中央執行委員会の直接の指導のもとで、七月一日に成立した中華民国国民政府は、「委員合議制」を採用し、「す

べての政務は委員会によつて議決され、主席は特別の権限をもたない」ことになつていた。[8] 中央執行委員会によつて選出された一六人の政府委員のなかから、汪精衛が主席となり、軍事、財政、外交の各部長には、許崇智、廖仲愷、胡漢民が就任した。しかし、国民政府は国際的承認を得ておらず、胡漢民の就任した外交部長の地位は閑職であつた、ということは否定しえない事実である。したがつて、大元帥代理として、孫文の後継者たらんとしていた胡漢民の野望は、党内における集団指導体制成立のまえに後退を余儀なくされた、といわなければならない。ここに、孫文亡きあとの国民党内の集団指導体制がひとまず成立したのである。

八月二〇日に発生した廖仲愷の暗殺は、国民党内の集団指導体制に大きな変化をもたらした。国民党中央執行委員会のもとに召集された政治委員会、軍事委員会、政府委員会からなる合同会議は、汪精衛、蔣介石、許崇智からなる特別委員会を組織し、その調査結果は、胡漢民、許崇智の二人の重要な指導者の失脚をまねくにいたつた。すなわち、暗殺教唆の嫌疑は、胡漢民の弟である胡毅生に及んだ。胡毅生は、すでに、廖仲愷、汪精衛、蔣介石の排斥論を公にしていたといわれている。したがつて、事件が胡毅生に及んだことは、党内における胡漢民の立場を苦しくし、ついに、彼はモスコーへ去らざるをえなくなつたのである。[9] また、すでにこの頃、許崇智の率いる広東軍は、独立的傾向をもち、国民党軍事委員会の命令には一応従うが、新たに編成された国民革命軍とは、共同行動をとろうとはしなかつた、といわれている。[10] その証拠として、許崇智は国民政府の軍事部長の地位につきながらも、蔣介石の指導下で、八月二六日におこなわれた国民革命軍の編成には、許崇智の軍隊は入つていなかつた、という事実が指摘される。しかるに、許崇智揮下の梁鴻楷、楊錦竜、張国禎が胡毅生と関係をもち、この事件に参画していたとの理由で逮捕された。[11] さらに、嫌疑は許崇智にまで及び、彼は胡毅生、陳炯明にまで通じていた、と考えられるにいたつたために、汪精衛と蔣介石は、合意のうえで学生軍を主力とする蔣の直轄部隊を動かし、九月二〇日許崇智軍の武装解除を敢行した。[12]

ここに、三人の国民党最高指導者が革命運動の舞台から去ることによつて、孫文亡きあとの集団指導体制が崩壊し、それにかわつて、汪精衛・蔣介石の協力体制が生れてくるのである。汪精衛は、国民政府主席、中央執行委員会政治委員会主席の地位にあり、さらに、一〇月には、廖仲愷の後を継いで、黄埔軍官学校駐在党代表に就任した。いわば、汪精衛は、党・政府の枢要な地位にあつた、ということができる。これにたいして、蔣介石は、黄埔軍官学校校長、国民革命軍第一軍軍長の地位にあり、軍事力の掌握を背景として、党内での発言力を増大してきた。

すでにみてきたように、廖仲愷暗殺後の国民党政権の強化は、汪精衛と蔣介石との協力のもとに遂行されてきた。さらに、謝持、鄒魯らの右派の指導者によつて、一一月に北京で召集された西山会議にたいして、広東の国民党中央は、汪精衛の名で談話を発表し、「開会と議決手続」の非合法性のゆえに、その立場を否認するとともに[13]、一九二六年一月に開かれた国民党二全大会は、謝、鄒らの党籍解除をふくむ多数の右派分子を処分し[14]、党内における汪・蔣協力体制を強化していつたのである。

湯良礼は、このような状況が汪精衛と蔣介石との「心からの協力」によつてもたらされたこと、ならびに、汪は蔣の軍事力を必要とし、蔣は汪の政治指導と影響力を必要とする、いわば両者が相互補完的関係にあつたことを主張している[15]。これにたいして、蔣介石の伝記作者は、汪精衛・蔣介石の協力によつてもたらされた、広東政権の強化の状況を蔣介石の側からつぎのように述べている。

「この七ヵ月間（一九二五・三―一〇……筆者註）の広東における軍事情勢の完全な安定は、蔣介石の一生での最も輝かしい軍事的業績の一つであつた。……蔣介石の電撃的な勝利が国民党を崩壊から救い、国民党史上最も統一強化された軍事力の基礎の上に党をおくことになつた。その後の党内における蔣介石の威信はこの時代の成功に由来する。」[16]

このようにして生れてきた汪精衛と蔣介石との相互補完的協力関係は、つぎの段階でいかにして崩壊していくのであろう

か。ハロルド・アイザックス氏は、この協力関係の崩壊の一端を、汪精衛の党・政府内における高い地位にたいする蔣介石の嫉妬心に求めている。[17] しかし、さらにつきつめれば、この個人的感情が政治的対立に発展するためには、党・政府の指導者としての汪精衛と軍の指導者としての蔣介石との地位の上での対立、その地位に規定される革命認識の相違を前提とする。後者の問題は後に検討されるので、ここでは前者の問題に簡単に言及しておくこととしよう。

党・政府の指導者としての汪精衛と軍の指導者としての蔣介石との関係を律するのは、文官優位を原則とする党代表制度である。三中全会は、党代表の権限について、つぎの原則を確定している。

(一) 軍校および軍隊にあつて、すべての命令は、党代表の副署により、校長あるいは当該官長によつて執行される。軍中の党の決議の執行もまたこの秩序を守らなければならない。

(二) すべての軍校および軍隊中の法令規則は、党代表の副署を経て完全に有効となる。[18]

かくて、党代表が軍中の命令、党決議の執行、法令規則に副署することによつて、軍にたいする党の支配が規約上保障されることになつていた。しかし、軍を実際に支配するためには、日常の軍事訓練、実際の作戦行動を通じて、兵士および将校の忠誠を確保しておくことは不可欠の要素である。この意味において、一九二四年九月に成立した教導団の規定が、党代表は部隊長官の「兵士のなかの信用と威厳を尊重しなければならない」こと、および、その職務上の原則として、「部隊の軍事行動を妨害してはならない」ことを明記していることは注目されなければならない。[19] すなわち、党代表は、形式的には軍司令官を指導しつつも、軍事行動における軍司令官の主導権を認めることによつて、一般兵士、将校の忠誠を確保する地位から遠ざけられていたのである。このような条件のもとで、党代表が軍指導者を支配することによつて軍事力の体現者となるためには、軍指導者が党代表に心服し、しかも同一のイデオロギー的方向をもち、さらに、軍指導者の意見が党内に反映される制度的保障が必要となつてくるのである。その反面、党代表は、その軍事力の行使にあたつて、軍指導者への依存を

強めていく傾向にある。この観点から、一九二五年末に成立した汪精衛・蔣介石協力体制をみてみると、汪精衛は、党・政府の指導者として、軍隊そのものにたいする直接的指導力を欠いていた。汪精衛とは対照的に、蔣介石は軍にたいする指導によつて党内における地位を強化してきたのである。したがつて、汪精衛と蔣介石とのあいだにイデオロギーおよび政策上の決裂がないかぎり、軍事力の行使において、両者の協力体制が維持されえた。しかし、両者のあいだにイデオロギー・政策上の対立が生じたとき、汪精衛は蔣介石の軍事力の行使のまえに敗退せざるをえなくなる可能性があるのである。したがつて、汪精衛・蔣介石協力体制そのものが、両者の党内における地位の相違のために、それを崩壊に導く契機を内包していたということになる。

一九二六年一月に広州で召集された国民党二全大会は、右派分子の脱落といわゆる左派、中共、蔣介石を中心とする軍人グループの進出によつて特徴づけられる。党組織のなかで影響力をもつ左派の権威は、労農運動を掌握する中共と軍を掌握する蔣介石を中心とする軍人グループによつて支えられていた。したがつて、緩衝勢力としての左派の指導力の強弱いかんによつては、中共と蔣介石グループの実力が直接対決する可能性があつた。

党内におけるこのような権力状況のなかで、一九二六年三月二〇日に中山艦事件が勃発した。現在のところ、この事件の性格にかんして確定した説明はない。[20] しかし、その原因いかんを問わず、この事件は、結果的には蔣介石の反共クーデターであり、さらに、ロシア人顧問の逮捕、汪精衛の失脚をもたらしたのである。蔣介石との権力闘争に敗れた汪精衛は、病気療養を理由にヨーロッパへの旅に出発せざるをえなかつた。

汪精衛は、中国にふみとどまるかわりに、なぜヨーロッパへの旅を選ばざるをえなかつたのであろうか。沢田謙氏は、その原因として、汪精衛はその性格からして、「党の内訌のやうな私闘」にまきこまれることを好まず、自ら身を引くことによつて、事件の円満な解決を望んでいたことを指摘している。[21] この見解は、汪精衛が国内にとどまりうるだけの力をもつて

いたのだが、彼の淡白な性格ゆえに、そのような行動をとらなかつた、ということを示唆している。湯良礼は、汪精衛が当時病気であつたこと、ならびに、個人的野心をもつていなかつたことを指摘しつつも、さらに加えて、蔣介石の行動は、汪が長年その確立に努力してきた文官優位の原則をふみにじるものであり、それゆえに両者の協力関係が不可能となつたことを明らかにしている。[22] 湯良礼の指摘は、まさに汪精衛・蔣介石協力体制に内在していた文官と軍官との矛盾が、現実のものとなつたことをしめしている。すなわち、汪精衛と蔣介石とのあいだに政策・イデオロギー上の相違が生じ、軍指導者としての蔣が自らの道を歩み出したとき、党・政府指導者としての汪は、蔣の軍事力の前に敗退せざるをえなかつたのである。この意味において、中山艦事件を契機とする汪精衛の外遊の原因は、単に汪の淡白な性格に求められるべきではなく、彼のおかれていた軍官にたいする文官の地位そのものの固有の性格に求められるべきであつた。換言すれば、「蔣介石との対立を激化することの不利を知[23]」つたがゆえに、汪精衛は外遊せざるをえなかつたのである。ここに、一九二五年末に成立した汪精衛・蔣介石協力体制が崩壊した。

そこで、検討されるべきことは、国民党二全大会から中山艦事件にいたる間の汪精衛と蔣介石との対立をもたらした底流にある、両者の政策・イデオロギー上の相違がいかなる点にあつたかということである。両者の政策・イデオロギー上の内容の相違そのものは後に検討されるので、ここではこの間の両者の対立点のみが指摘される。そもそも、二全大会から中山艦事件にいたる汪精衛と蔣介石との対立は、第一義的には蔣介石と中共との対立である。したがつて、汪精衛との関係を考慮しつつ、中山艦事件にいたる蔣介石の反共化の諸要因を整理してみることが必要となる。

この間、汪精衛と蔣介石の双方から、直接相手との対立をしめす資料に乏しい。わずかに、蔣介石は、一九二六年二月二七日に汪精衛を訪れ、かねてから北伐必敗論をとなえていたキサンカの帰国を進言した。つづいて、三月八日蔣介石は再び汪精衛を訪れ、ソ連人およびコミンテルンにたいして自主的立場を保持する必要性を説いたところ、このことが直ちにキサ

ンカの耳に入つてしまつたため、蔣は、汪と共産党との結託の強さを認識せざるをえなかつたことを後年明らかにしている。[24] このことは、蔣介石の汪精衛にたいする不信が、コミンテルン代表とその指導下にあつた中共をめぐる問題から生れてきている、ということをしめしている。

そこで、蔣介石とコミンテルン代表、中共とのあいだに横たわつていた対立関係を彼の日記からひろつて整理してみると、つぎのようになる。蔣介石の当時コミンテルン派遣の軍事顧問、とくにキサンカとの主要な対立点は、北伐をめぐるものであつた。北方に革命根拠地を建設する必要があるという観点から、蔣介石は、幾度か北伐を主張し、キサンカの反対にあつていた。[25] かかる対立を背景として、蔣介石がロシア人顧問に対して自主的立場を保持する必要性を説いていたことは、すでに触れたところである。したがつて、蔣介石が二月一六日に参謀団の改組を迫つたときにも、ソ連人を更迭し、別に政務官を任命することを主張していた。[26] さらに、感情的な面においても、蔣介石は、ソ連人が彼を「疑いきらい」、「侮蔑している」、という印象をもつにいたつたのである。[27]

国民党二全大会を前後としてみられる中共勢力の抬頭は、コミンテルン派遣の軍事顧問との対立以上に、蔣介石の党内における地位への挑戦であつた。蔣介石を悩ませた中共との対立の第一にあげられるものは、黄埔軍官学校における中共系の青年軍人連合会とそれに反対する孫文主義学会との対立であつた。当初の蔣介石の立場は、反共的孫文主義学会の立場と同一ではなかつた。例えば、一九二五年一二月二八日に、孫文主義学会が明日デモンストレーションを行い、西山会議のビラをまこうとしている旨を伝える汪精衛からの電報を受けとつたとき、蔣介石はその行動を阻止するよう返電を打つことによつて、西山会議派ならびに孫文主義学会に反対する態度を示した。[28] 蔣介石は、さらに、一九二六年二月二日に、両会の対立解消のために連席会議を開催した。この会議は、蔣介石を主席として、㈠両会幹部は相互に加入することが許されるべきこと、㈡両会は、軍校校長と党代表との指導を受けること、㈢党代表をのぞいた、団長以上の高級長官は、両会に加入できな

い、(四)両会会員のあいだに諒解できないことがあるときには、校長および党代表の解決を請わねばならない、との四つの事項を決議したが、両会の対立はこれによつて解消することはなかつた。[29] かくて、蔣介石は、その反共化につれて孫文主義学会への接近の度合を強めていつたのである。蔣介石の反共化の過程で、黄埔軍官学校内の青年軍人連合会のみが障害となつたのではなかつた。党・軍にいる中国共産党員全体に蔣介石は敵意をもつにいたる。すなわち、「共産分子の党内活動は、誠意をもつて接することを不可能にしており」、[30] 共産党員は「本党本軍のなかにあつて、一つの団体で二つの主義をもつている」。[31] かかる中共に対する不満に加えて、蔣介石の耳に入つてくる中共側の蔣批判は、ますます彼を反共化させていつた。例えば、中共党員高語罕が、「われわれの団体には一人の段祺瑞がおり、北方の段祺瑞を打倒するためには、まずこちらの段祺瑞を打倒しなければならない」、と公言することによつて蔣介石を誹謗していたといわれている。[32] かくて、蔣介石は、感情的にも、「言葉につくせない、言うに忍びない」苦痛を受けたのである。[33]

以上のことから、中山艦事件をめぐる汪精衛と蔣介石との対立は、中共、ソ連といかなる関係をもつか、ということをめぐる問題であつたことがわかる。そこで、つぎに、これらの問題がこの間の国民党の党路線の発展のなかでいかにとらえられてきたかをみることとしよう。

(1) 汪精衛は、北京で孫文の遺嘱の起草にあたり、彼の死に立ちあつた(汪精衛「総理逝世一週年紀念大会訓話」、一九二六・三—『汪精衛集』、第三巻、一九三〇、上海、一一一—一一二頁)。一九二八年七月の北京における北伐完成報告祭で、蔣介石は、第一次東征途上、広東省興寧で孫文の死のニュースに接したことを明らかにしている(橋樸「蔣介石」、一九二八・一一、『中央公論』—『橋樸著作集』、第一巻、一九六六、五五六頁)。廖仲愷は、当時広東省東部で、党代表として東征軍の慰労にあたつており(『廖仲愷集』一九六三、北京、一三三頁の註)、胡漢民は、大元帥代理として、広州で職務を遂行していた(毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』、一九六五年香港龍門書店発行の影印本、三九九頁)。

(2) 毛思誠編、前掲書、四二六—四二八頁。

(3) 右同、四二七頁。

(4) T'ang Leang-li, *Inner History of the Chinese Revolution*, 1930, London, p. 200. 胡漢民の兄は広東省の財政を支配し、それから私的利益を得ており、弟は、広東国民党政権と対立しつつあった楊希閔に通じていたといわれている。

(5) 毛思誠編、前掲書、四二七―四二八頁。

(6) 「中国国民党接受総理遺嘱宣言」（一九二五・五・二四）―中央執行委員会秘書処『中国国民党中央執行委員会第三次全体会議議決案刊要』、一九二五、一〇頁。

(7) 毛思誠編、前掲書、四五二頁。

(8) 張其昀『党史概要』、第二冊、一九五九（第三版）、台北、四八二頁。

(9) 董顕光著、寺島正・奥野正巳共訳『蔣介石』、一九五六、四七―四八頁。

(10) T'ang Leang-li, op. cit., p. 211.

(11) Ibid., pp. 220-221.

(12) 董顕光著、前掲書、四八頁。

(13) 佐藤俊三『支那近世政党史』、一九四〇、三〇八頁。

(14) 波多野乾一『中国国民党通史』、一九四三、三二八頁。

(15) T'ang Leang-li, op. cit., p. 226.

(16) 董顕光著、前掲書、四九―五〇頁。

(17) Harold R. Issacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution*. 2nd revised edition, 1962, Stanford, p. 91.

(18) 「中国国民党対於党軍校及軍隊之訓令」（訓令第一二号）―前掲、三中全会決議案、一九頁。

(19) 羅家倫主編『革命文献』、第一〇巻、一九五五、台北、七―八頁。

(20) この事件の性格にかんして従来おこなわれてきた説明は、大別してつぎの三つである。㈠中共陰謀説、㈡蔣介石陰謀説、㈢西山派陰謀説、がそれである。三月一八日に、軍鑑中山艦が理由なく黄埔へ廻航してきたので、蔣介石は、その命令系統にかんして、海軍局代理局長李之龍（中共党員）に問うたところ、その答えに不審な点が多かったために、この動きを反蔣行動と見なし、二〇日に、李之龍をはじめとする共産党員、さらには、ソ連人顧問の逮捕にふみきった、というのが事件直後の蔣介石の説明である（一九二六・四、「宴会全体党代表訓話」―『蔣介石先生演説集』、第三集、一九二九、上海、一六七―一六九頁）。中共側の見解では、李之龍に中山艦の廻航を命じたこと自体が、蔣介石と孫文主義学会の一部分子の陰謀である（胡華編『中国新民主主義革命史初稿』―一九五〇、広州、六八―六九頁）。さらに、当時、西山会議派の人物が蔣介石のまわりに入りこみ、汪精衛にたいする中共の批判を蔣介石の目から隠し、汪と中共との関係を親密に見せかけることによって、汪・蔣間の離反を策していた、というのが汪精衛側の主張である（T'ang Leang-li, op. cit., pp. 243-245）。中山艦事件に論及したものとして、古くは三上諦

聴氏の「中山鑑事件の一考察」（『石浜先生古稀記念東洋学叢』）があり、最近では、波多野善大氏の「中山艦事件おぼえがき」（『名古屋大学文学部研究論集』四四）がある。

(21) 沢田謙『汪兆銘』、一九三九、一二八―一二九頁。

(22) Tang Leang-li, op. cit., p. 246.

(23) 森田正夫『汪兆銘』、一九三九、二二一頁。

(24) 蔣介石著、寺島正訳『中国のなかのソ連』、一九六二、三九頁。

(25) 毛思誠編、前掲書、一九二六・一・二八、二・二二、二・二四、三・一二、三・一八の日記、六一四、六二一、六二二、六二六、六二七頁。

(26) 毛思誠編、前掲書、六一九頁。

(27) 毛思誠編、前掲書、二・一一の日記、六一八頁。

(28) 毛思誠編、前掲書、五七三頁。

(29) 毛思誠編、前掲書、六一六頁。

(30) 毛思誠編、前掲書、一九二六・三・九の日記、六二五頁。

(31) 蔣介石「対官佐学生訓話(三)」（一九二六・四・九）―『蔣介石先生演説集』、第三集、一二二頁。

(32) 蔣介石「宴会全体党代表訓話」（一九二六・四）―『蔣介石先生演説集』、第三集、一六〇頁。

(33) 毛思誠編、前掲書、一九二六・三・一七の日記、六二七頁。

三

一九二五年五月下旬に広州で開かれた国民党三中全会は、孫文亡きあとはじめて新たな党路線を明らかにした。その特徴は、㈠国民党は孫文の遺志を継いで、農民・労働者を中心とする、大衆的基盤にもとづいた反帝国主義・反軍閥闘争を継続・強化すること、[1]㈡北京臨時執政政府と国民党との合作は、「完全に絶望」的であること、㈢「平等をもつて我を扱う民族」との結合による、世界被圧迫民族の解放、㈣「平等をもつて我を扱う民族」とは、「現代の世界」ではソ連であることの諸点であつた。[2]㈠と㈡は、孫文亡きあとの国民党が、一全大会宣言で明らかにされた反帝国主義的諸階級の統一戦線の方針

を、基本的に継承していくことを示している。この点にかんして、宣言は、「わが民族の平等と国家の独立を尊重できるものは、すべて中華民国親善の友となる。これに反すれば、すなわち、わが国家の敵となる」、と述べている。[3] 国家と民族の独立と平等にかんする、敵・味方の画然たる区別は、一面では、国民党の反帝国主義的態度の強さを示し、他面では、国民党の反帝国主義勢力との結合の可能性を示す。その意味において、㈢と㈣は注目すべきである。中国の国民革命が、「平等をもつて我を扱う民族」と共同奮闘するという考え方は、すでに孫文の遺嘱のなかに見出される。しかし、ここで、それがソ連であることが明示された。さらに、世界の被圧迫民族の解放を唱導することによつて、中国の国民革命は、世界的規模での、反帝国主義的民族解放運動の一環として把握されるにいたつたのである。

上海における五・三〇事件、ならびに、広州における六・二三沙基惨案は、広州で成立しつつあつた国民党政権の存立そのものに対する挑戦であり、三中全会で示された国民党の反帝国主義的態度に対する試金石でもあつた。一九二五年六月二三日の事件当日、国民党中央執行委員会は、宣言を発し、上海における五・三〇事件をはじめとする、この種の事件の勃発の原因は、中国に課せられた不平等条約にあることを指摘し、その「取消し」を求める態度を表明した。しかし、この目的を実現するにあたつて、宣言は極めて慎重な態度をとり、「武力」や「狭隘な復仇手段」によるのではなく、「平和な正当な方法」によるべきことを呼びかけた。[4] かくて、イギリス官憲との軍事的対決を回避した広州の国民政府が、この目的実現のためにとりえた手段は、労働者のストライキであつた。

すでに、五月一日に成立した中華全国総工会は、林偉民、劉少奇らの指導下にあり、当時の労働運動は、中共の強い影響下にあつた。さらに、当時、「あらゆる大衆組織、および、政府・（国民党）党機関の下層組織にあつては、共産主義者とそのシンパが、すべての日常工作を遂行し、最大の個人的影響力を行使していた」のである。[5] 事件勃発直後、香港の労働者は広州へ引きあげ、蘇兆徴、鄧中夏らの共産党員の指導するストライキ委員会の下で、翌一九二六年一〇月までストライキを

続けた。広州の国民政府は、ストライキを直接指導しなかつたけれども、ストライキの期間中、一ヵ月三〇万ドルにのぼる財政援助を与えたり、[6] イギリスに経済断交を宣言し、港口を閉鎖することによつて、間接的にストライキを援助した。[7] 三中全会の明らかにした反帝国主義の方向が、沙基惨案を通して具体的に展開したとき、広東の国民党政権は、大衆運動とそれを指導する中共の力に依存せざるをえなかつたのである。ここに、広東政権存続のための容共政策継続の必要性があつた。三中全会採択の訓令第一〇号は、この要請に合致するものであつた。この訓令は、帝国主義・軍閥等の反革命勢力による党の容共政策攻撃に対して、以下の理由から反論を加えている。㈠国家の独立を求める国民党は、半植民地中国で圧迫されている各階級を代表する、㈡党綱を実行し、党章程につとつて行動する者は、すべて国民党員たりうる、㈢中共はプロレタリアートの党であり、たとえ中共を消滅させても、中国のプロレタリアートを消滅させることはできない、というのがそれである。[8] この容共の主張は、一九二五年八月の国民党二中全会の決議を直接引き継ぐものであり、党はここで容共政策を再確認したことになる。かくて、連ソ政策を基軌とする国民党の反帝国主義的世界政策の展開は、大衆運動を媒介として、必然的に容共政策に結びつくのである。

一九二六年一月に広州で開催された国民党二全大会の宣言は、[9] 三中全会の明らかにした国民党の方向をさらに発展させている。この宣言の第一の特徴は、反帝国主義的世界政策を体系的に展開していることである。宣言の世界情勢にかんする基本的認識は、第一次大戦前、「帝国主義者が、極少数の本国人民を以て、大多数の植民地人民を支配することができた」が、今日、「帝国主義の基礎はすでに動揺し、崩壊の期遠からざる」状況にある。動揺しつつある帝国主義体制にとつて、「世界上一切の被圧迫民族及び民衆の連合奮闘がその致命傷となる」。ここに、世界的規模での反帝国主義的統一戦線結成の必要性がある。反帝国主義陣営は、植民地・半植民地の諸民族、「帝国主義本国内の被圧迫民衆」、社会主義国ソ連から構成される。かくて、反帝国主義陣営に属する中国の革命は、世界革命の一環として理解され、特に、「ソヴィエト・ロシアに対し

て誠意をもつてこれと合作」する必要性が強調される。かくて、「帝国主義打倒は国民革命の第一工作」であるということになる。

宣言の第二の特徴は、必ずしも明確な形ではないが、民族解放運動における労働者階級の指導的地位に言及していることである。宣言はつぎのように述べている。

「欧州戦争中（第一次世界大戦―筆者註）、植民地と半植民地の工業は、にわかに発展し、その自然の結果として、労働者階級の発展をもたらした。すでに、労働者階級は、驚くべき速度で国民革命中の有力な成分になつた。それと同時に、さらに、民族解放運動のなかでの指導的地位を取得した」。

さらに、二全大会採択の「工人運動決議案」は、「工人大衆は各界民衆のなかで最も重要である」、と述べている。[10] このことは、国民党一全大会以来、現に発展しつつあつた反帝国主義的労働運動、および、それを指導した中共の力を高く評価していることを示している。

周知のごとく、国民党二全大会は、蔣介石を中心とする軍人グループと中共に支持された、左派の指導下にあつた。したがつて、汪精衛が宣言起草委員の一人であつたことを考慮すると、[11] 民族解放運動における労働者階級の指導的地位を認めたことは、汪が中国革命における労働者階級、および、それを指導する中共の指導権を認めたことを意味するのであろうか。張国燾の回想録に見える一つの挿話は、この間の事情を説明するのに役立つと思われる。彼はつぎのように述べている。

「（国民党二全）大会挙行の前夜、モスコーから一通の非常に長い電報が来た。ボロディンがそれを翻訳してみると、帝国主義に反対する大理論であつた。私とボロディンがこの電文をまさに読んでいたとき、汪精衛がやつて来た。ボロディンは解釈を加えることなく、電文を彼に渡した。彼は全文を読み終るのを待たずに、内容は大変良く、大会宣言の資料となりうると言つた。のちに、この文章は、果たせるかな、今回の大会宣言の第一段となつた。[12]」

先に引用した民族解放運動における労働者階級の指導的地位を認めた個所は、第一段の世界の現状と題する部分にあつた。

したがつて、張国燾の回想を考慮すると、この部分はソ連の影響を強く受けていたことになる。しかも、汪精衛はそれに充分目を通していなかつたのである。したがつて、汪精衛は、民族解放運動における労働者階級の指導的地位を認める部分を充分な注意を払つて見ることをしなかつたのかもしれない。しかし、その部分をさらに詳細に検討してみると、注目すべきことは、宣言は、民族解放運動における労働者階級の指導的地位に一般的に言及しているけれども、その反面、中国の国民革命においては、労働者階級が有力な成分になつたと主張するにとどまつていることである。したがつて、中国の国民革命において、労働者階級が指導的地位にあるとは主張されていない。このことは、一面では、一般的形であるにせよ、民族解放運動における労働者階級の指導的地位を認めることによつて、中共指導下の労働運動を高く評価するが、他面では、後述するごとく、中国の国民革命における労働者階級の指導性を認めることを回避する汪精衛の立場を反映しうるものであつた。以上いずれの意味においても、汪精衛は、二全大会宣言における、民族解放運動中の労働者階級の指導的地位を認めている個所に対して、反対する立場にはなかつたのである。要するに、二全大会宣言は、㈠世界的な反帝国主義的統一戦線、とくに連ソ政策、㈡反帝国主義闘争における労働者階級と中共の位置づけの問題で、党の従来の立場を確認し、かつ、新たに発展させたものであつた。

かくて、汪精衛・蔣介石協力体制の成立と崩壊、それにともなう党路線の発展を通してみると、当時、両者の直面していた主要な問題は、㈠反帝国主義闘争における大衆の政治参加、㈡大衆組織を掌握する中共との関係、㈢世界的規模での反帝国主義的統一戦線、とくにソ連との関係であつた。そこで、つぎに、これらの諸点をめぐる汪精衛と蔣介石との政治路線を検討することとしよう。

(1) 「中国国民党接受総理遺嘱宣言」(一九二五・五・二〇)—『中国国民党中央執行委員会第三次全体会議議決案刊要』、中執委秘書処、一九二五・七、九頁。

(2) 「中国国民党対於時局宣言」—前掲、三中全会議決案、二九—三〇頁。

(3) 「中国国民党接受総理遺嘱宣言」、九―一〇頁。
(4) 「中国国民党対於沙面惨案宣言」（一九二五・七・二三）―『中国国民党宣言彙刊』、一九二八、上海、一三四―一三五頁。
(5) Harold R. Issacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution*, 2nd revised edition, 1962, Stanford, pp. 90-91.
(6) Tang Leang-li, *Inner History of the Chinese Revolution*, 1930, London, p. 209.
(7) 胡華編『中国新民主主義革命史初稿』、初版、一九五〇、広州、六〇頁。
(8) 「中国国民党関於共産党員加入本党之訓令」―前掲、三中全会決議案、一二三―一二四頁。
(9) 二全大会宣言については、『中国国民党宣言彙刊』、一六三―一八一頁を参照のこと。
(10) 中国国民党中央執行委員会『中国国民党第二次全国代表大会会議録』、一九二六、一〇八頁。
(11) 右同、二五頁。他の二人の起草委員は、邵力子と高語罕であった。
(12) 張国燾「我的回憶」、第一〇篇第三章―『明報月刊』、一九六七・三、香港、九五頁。

四

まず、反帝国主義闘争における大衆の政治参加にかんする、汪精衛の立場を検討することからはじめよう。「革命は本来民衆のためのものである」。「民衆」とは、農民、労働者、「商人」、知識人である。[1] この大衆の構成要素は、基本的には国民党一全大会宣言における、反帝国主義的諸階級の統一戦線の諸要素に一致している。しかし、これらのなかで「商人」なる概念は不明確であり、汪精衛自身もそれに明確な定義をあたえていない。そこで、まず、この言葉が本来使用されていた一全大会宣言、ならびに、それが具体的に論ぜられている二全大会宣言における意味を明らかにすることから始めなければならない。一全大会宣言は、「資本家」をもつて、「軍閥・官僚」の支配に替えようとする、いわゆる「商人政府派」の主張を批判している（傍点筆者）。[2] この文脈からもわかるように「商人」は「資本家」によつておきかえられている。したがつて、宣言のなかの「商人」は、単に商業従事者のみに限定されるのではなく、近代的資本家層を含む、ブルジョアジー全体を意味することになる。さらに、一全大会宣言は、「帝国主義に頼つて生存する……国内・国外の資本家」と帝国主義・軍

閥の支配に苦しむ「小企業家」、「小手工業者」の存在に言及している。[3] このことは、帝国主義・軍閥と結託した買弁的資本家と中小資本に基いたいわゆる民族資本家との対立を指摘している、といえるであろう。この認識は二全大会宣言にひき継がれる。そこでは、「買弁階級」と「新興工業」の担い手が区別され、後者に援助を与えるという立場が明らかにされている。[4] 以上のことから、「商人」とは、商業従事者をも含む、近代的資本家階級を意味し、そのなかでも、帝国主義と結びついていない、いわゆる民族資本家階級に限定して用いられていることがわかる。汪精衛は、わずかに「商人」なる概念を帝国主義との関連で理解し、「買弁階級」と非買弁階級に分けて考えているにすぎない。[5]

そこで、つぎに問題となるのは、反帝国主義的統一戦線のなかで、これら大衆の占める位置である。「民衆の最大部分は、農民と工人である」。「農民と工人は、必ず国民革命の最大勢力となる」。しかるに、「帝国主義が植民地を必要とするその最大の目的は、農民が血と汗で得た農産物を掠奪して、原料とするにほかならず、また、工人が血と汗で得た製造品を掠奪して、商品とするにほかならない」。したがつて、「農民、工人自身の利益は、帝国主義と絶対に衝突する」。また、商人について、汪精衛は、「金融操縦等のごとき帝国主義資本の圧迫、関税協定のごとき政治力の圧迫、これらすべてのために、商人は、永遠に独立発展の希望がない」、と考える。それゆえに、商人「自身の利益もまた、農民、工人と同様に、帝国主義と絶対に衝突する」。「知識階級にいたつては、……すべてがその良心の圧迫にかかつてい」る。「だから、かれらの占める地位は同じである」。[6] すなわち、汪精衛においては、労働者、農民、商人、知識人の利害関係が、反帝国主義の線上で一致する、と考えられていたのである。汪精衛のこの立場は、一面では、大衆内部の諸矛盾を帝国主義との闘争という対外的矛盾に解消しており、他面では、中共との関係においてみるなら、反帝国主義闘争における労働者階級の指導性を認めることを回避している。労働者階級の指導性を認めることは、それを指導している中共の指導性を認めることになる。かくて、「中国国民党は、民衆を連合して国民革命をおこなう党であつて、無産階級の党ではない」、ということになる。[7]

このような観点から、汪精衛は実際の大衆運動をどのようにとらえていたかをみてみよう。一九二五年六月の沙基惨案に端を発する省港ストライキについて、汪精衛はつぎのように述べている。「六月末から九月末までについていえば、省港ストライキのために、香港の帝国主義者に経済上の大打撃をあたえ、その経済侵略の進行に大頓挫を来した。同時に、香港・広州間の交通を切断したがために、一般の帝国主義の走狗は、仲介に奔走する役割を失ってしまった」。したがって、「香港のストライキ団体を援助することは、帝国主義打倒の各種工作の一つである」[8]。このような帝国主義との対決の下で、「香港にいる華商と香港を離れた出稼ぎ労働者は、すべて……同じ目的のために、同じ苦痛を受けている。ここ二、三日の間、（華商の）皆さんと労働者の友人は、互に慰問しあい、互に励ましあっている」のである[9]。また、一九二五年一〇月に始まる国民革命軍の第二次東征の直前に、汪精衛は、広東省汕頭における労働運動に言及している。「現在、反革命の勢力（陳炯明軍—筆者註）は、いぜんとして汕頭に充満している。かれらは、帝国主義者のために、勝手放題にストライキを破壊し、国民党を解散させている」。したがって、「東征軍とストライキ中の労働者の友人は、同一の目的をもっており、東征の勝利は、すなわちストライキの勝利である」、ということになる[10]。これらの例にみられる汪精衛の考え方の特徴は、労働運動を帝国主義・軍閥との対立関係においてとらえ、そのなかにおける労働者と商人との協力を説いていることである。

他方、広東省における農民運動に対して、汪精衛はつぎのように考える。「前回（第一次東征—筆者註）党軍が海豊に来たとき、農民の発展を援助した。農民を援助し、地主を圧迫しなければ、これら地主はすべて、陳炯明同様、人民を搾取する悪党であるために、海豊の農民は地主の圧迫を受けるだけである」。この度の第二次東征の意義も、「第一には、（陳炯明に圧迫されている）東江の農民を救出することである」[11]。ここで、汪精衛は、農民運動を陳炯明・地主勢力との対立関係においてとらえていることがわかる。

以上のことからわかるように、汪精衛の立場は、事実上、労農階級の重要性を承認したにもかかわらず、反帝国主義闘争

における労働者階級の指導性を認めないという点において、理論上、大衆を構成する社会集団の中心的勢力は、労働者階級である必要はなく、いかなる社会集団もそこには平等に含みえたのである。このことから、党はすべての階級のなかに組織的基盤をもつか、すべての階級のなかに組織的基盤をもたないか、の二つの可能性が生まれてくる。先に触れたように、労農階級を中心とする大衆の組織化の任務は、基本的には中共の手中にあつたために、汪精衛は後者の行動様式をとらざるをえなかつた。すなわち、汪精衛は、大衆の政治参加の必要性を認めつつも、自らはその組織化に乗り出さなかつたのである。いわば、汪精衛は、中共の組織した大衆運動を利用する立場にあつた。汪精衛は、労農運動にかんして、「われわれが農民、労働者を保護すれば、農民、労働者もまたかならず、われわれが反革命的軍閥を除くのを援助してくれる」、と考える。(12) ここにみられる汪精衛の大衆運動にたいする関心は、反帝国主義的統一戦線の上で、自らはその組織者となることはなく、いかにして大衆を構成する諸階級の利害関係を調整し、革命運動に動員するか、ということであつた。したがつて、大衆運動の組織者たる中共との対比において、汪精衛の役割は、大衆運動の統合者のそれであつた。大衆運動の統合者である汪精衛が、大衆の政治参加の必要性を認めれば認めるほど、その組織者たる中共に依存せざるをえなかつたのである。ここから汪精衛の中共に対する態度が生れてくる。

汪精衛の中共に対する態度を検討するにあたつて、まず、三民主義もしくは民生主義と共産主義もしくはマルクス主義との関係にかんする、彼の態度を明らかにすることから始めよう。この問題にかんして、汪精衛は、孫文の著作を引用する。『民生主義は、すなわち社会主義であり、別名共産主義ともいわれ、それは、すなわち、大同主義である。』『共産主義は民生の理想であり、民生主義は共産の実行である。それゆえに、両主義にはなんら区別がない。もし区別するとすれば、それは方法である。』(13) ここで、私は、民生主義とマルクス主義との理論的相違をとりあげて論ずるつもりはない。両者の「方法」の相違を解明しようとする汪精衛の態度が問題なのである。しかるに、この「方法」は、「学理」ではなく、「事実」によつ

て決定される。かくて、中国革命における反帝国主義的諸階級の統一戦線とロシア革命における労農同盟、ならびに、中国における「以党治国」とロシアにおけるプロレタリアート独裁の「方法」が、「学理」上の相違にもかかわらず、「事実」上は同一視されているのである。[14] ロシア革命の労農同盟における労働者階級の指導性が無視されることによつて、それは、中国の反帝国主義的諸階級の統一戦線と同一視される。同じく、ソ連のプロレタリアート独裁における労働者階級の指導性が無視されることによつて、それは、中国における「以党治国」という統治方式一般と同一視される。かくて、民生主義と共産主義、もしくは、中国革命とロシア革命の「方法」の「学理」上の相違を無視することによつて、そこに「事実」上の同一性を見出そうとする汪精衛の立場の根底には、労働者階級の指導性の承認を回避しようとする、大衆運動の統合者としての認識がある。このことは、三民主義とマルクス主義との立場の相違を認識しつつも、中共との協力を継続していこうとする、汪精衛の態度を示唆しているものと考えられるのである。このような姿勢から、『共産党員個人の好からぬ行為をもつて、彼らの規準となし、共産党に反対することはできない』[15]という、汪精衛の中共に対する好意的態度が生れてくる。かくて、「中国が今日最も必要としているのは、国民革命である。それゆえに、われわれ同志は、現在、決して共産・反共産の問題を出してはならず、帝国主義と反帝国主義の問題があるだけである」[16]、ということになる。

民生主義と共産主義、非共産派と共産派との対立を否定する汪精衛は、右派の容共政策攻撃に対して反論している。「共産・反共産のスローガンによつて、国民革命の考えを二分してしまうことは、本当に由来のないことであるといえる。」「帝国主義、一般の反革命・假革命の党員と軍隊」が、「反共産のスローガンでもつて、かれらの無窮の罪悪をごまかし、同時に、他人を誘惑して、無窮の罪悪に陥し入れようとしている。」[17] このような反革命勢力の策動による、党内二分の危機に最も深刻かつ密接に関連していたのは、西山派の行動、ならびに、黄埔軍官学校内の孫文主義学会と青年軍人連合会との対立であつた。先に述べたように、西山会議終了直後に、汪精衛は談話をもつて彼の見解を公にし、西山会議派の攻撃の中心と

なつていた、共産党員の二重党籍にかかわる、いわゆる「跨党」問題の解決には反対しないが、その「開会と議決手続」が違法である、という態度を表明した。かかる西山派に対する汪精衛の妥協的態度は、二全大会まで引継がれ、中共の西山派に対する厳罰の要求に抗して、彼は寛大な処罰を主張していたのである。[18] しかし、一九二六年三月になると、汪精衛はこの立場を硬化させ、民生主義を放棄したという理由から、西山派を反動派として非難するにいたる。[19] さらに、汪精衛は、黄埔軍官学校内の孫文主義学会が、国民党中央の指導下に置かれなければならないと主張しつつも、実際には、北京、上海の孫文主義学会分会が、連ソ政策、ならびに、「各派革命分子を容納する政策」に反対しているとの理由から、[20] それを非難している。かかる汪精衛の右派に対する批判的態度は、彼の容共政策擁護の他の一面であつたのである。

最後に、汪精衛における連ソ政策は、基本的には、反帝国主義的世界政策の一環として位置づけられる。しかも、この位置づけは、汪精衛のロシア革命の国際的・国内的評価と密接に関連してくる。そこで、まず、ロシア革命の国際的反帝国主義の側面の評価を検討するにあたつて、汪精衛の帝国主義のとらえ方を明らかにすることから始めよう。

汪精衛によると、帝国主義とは、「国家が自己のすぐれた政治・軍事上の力を利用して、他の国家・地方・民族に経済侵略をおこなうもの」である。[21] 今日の世界では、「欧米が帝国主義の発源地であり、」「欧米の国家には、はつきりと二つの階級が生れてきている。……欧米各国の産業は発達したが、すべて土地と資本は、少数の人の手によつて操縦されており、国内の貧富間の不均等の現象を生むにいたつた」のである。[22] そこで、労働者の奴隷的状態は国内市場を狭隘にする。それに反して、「生産力が膨脹しすぎるために、機械制工場が生産した商品は、国内で売りさばくことができず、それゆえに、急遽国外に市場を拡大し、商品の販売地とする。かつまた、商品を製造するには、原料が必要であり、国内の原料は供給が充分でなく、それゆえに、また急遽国外に天然資源を求め、原料供給の地とするのである」。[23] 以上のことから、汪精衛は、帝国主義が、資本主義諸国におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの階級的矛盾の国際的展開と考えていることがわかる。

つぎに、汪精衛は、帝国主義の中国侵略の性質について、それを経済的側面と武力的側面に分け、経済的侵略の重大性を強調する。なぜなら、歴代の異民族の中国侵略は、武力・政治力による侵略であつて、国を滅ぼしこそすれ、人民を滅ぼすことはなかつた。しかし、武力をともなう経済侵略は、人民の「生計」を滅ぼし、人民の「生計」を滅ぼすことは、「種」を滅ぼすことになるからである。[24] かかる性格をもつた帝国主義の中国侵略の形態は、軍閥との結合である。「革命の敵は帝国主義であり、」「大小軍閥」は「帝国主義の傀儡」である。[25] 小軍閥は、さらに、「郷間の劣紳土豪と結びついている」。[26] それゆえに、「国民革命の唯一の目標は帝国主義である」、[27] ということになる。すなわち、帝国主義支配との対決を中国革命の決定的要素であるという考え方は、この時期の汪精衛のなかに一貫して存在している。汪精衛は、諸事実のなかにこの論理を見出している。過去においては、一九一三年の五国銀行団による袁世凱への借款、一九一七年の日本による段祺瑞への借款、一九二〇年以後の米英による曹錕、呉佩孚への借款があつた。[28] さらに加えて、一九二四年の国民党改組の折に、国民党は、香港のイギリス帝国主義、北京の北洋軍閥、広東省南路の鄧本殷、東江の陳炯明、広州の楊希閔、劉震寰と対峙したこと、六・二三沙基惨案は六月一二日の国民党軍による広州奪回に対する、帝国主義の「示威」にほかならず、それ以後、帝国主義の攻撃はますます激化したこと、[29] 廖仲愷の死は、「直接的には」「反革命・假革命の党員と軍隊の手」によつて、「間接的には」「帝国主義の手」によつてもたらされたこと、[30] などが国民党と帝国主義・軍閥との対決の例としてあげられている。「中国人を利用して中国人を殺す」、[31] これが帝国主義・軍閥支配の論理である。かくて、中国における反帝国主義・反軍閥の運動は、世界的な反帝国主義運動と結びつく。

汪精衛によると、帝国主義は、一九世紀以来世界を侵略し、アジア・アフリカの人民を「世界の被圧迫民族」に変えた。帝国主義は、また、本国に被圧迫階級をつくり出した。さらに、ソ連は、「最初に中国と中ソ協定を成立させ、以前の帝国時代に中国と締結した一切の不平等条約と種々の特権を一切取り消し、双方の平等と主権を相互に尊重する条約を改めて

結んだ」。かくて、「帝国主義打倒の戦線において、われわれは、終始、世界の被圧迫民族と一緒に立ちあがり、ヨーロッパの被圧迫階級と一緒に立ちあがり、世界革命の先進と一緒に立ちあがらなければならない」。その意味において、世界は二億五〇〇〇万の抑圧者と一二億五〇〇〇万の被抑圧人民との対立によつて特徴づけられるのである。[32] かくて、世界的規模での反帝国主義的統一戦線の線上でソ連との提携の可能性を示唆したのち、汪精衛は、ロシア革命の国内的側面に目を転ずる。

蔣介石と比較すると、ロシア革命の国内的側面にかんする汪精衛の言及は少い。汪精衛は、ロシア革命の国内的側面を、二つの視点から評価する。第一は、労農同盟の問題であり、第二は、プロレタリアート独裁の問題である。これらの点については、すでに触れておいたが、ここにその個所を引用すると、つぎのようになる。第一点についてみるなら、「全民革命は、かならず、大多数の農民、労働者民衆を基礎とする」。しかるに、「ロシア革命を例にとれば、トロツキーは、純粋に労働者階級をもつて基礎とすることを主張した……。しかし、レーニンは、農民階級をひき入れて、労働者階級と合作し、それによつて革命の勢力を集中することを主張した。ロシア革命の成功は、レーニンの主張の実行による」。[33] 第二点について、汪精衛はつぎのように述べる。「マルクス派の無産階級独裁を主張することと総理の軍政・訓政を主張することとは、名目上同じではないが、実質上は一致する」。要するに、汪精衛によれば、両者は「以党治国」という点で一致するのであり、ロシア革命は、この「以党治国」を実行したのである。[34] 後述する蔣介石との対比でみるとき、ここにみられる汪精衛のロシア革命の国内的側面に対する視点は、明らかに大衆の政治参加の形態と革命政権の性格にかんするものであつた。この関心の傾向は、大衆の政治参加の重要性を認めつつも、自らはその組織とならなかつた。大衆運動の統合者としての汪精衛の役割と無関係ではなかつたと思われるのである。そこで、つぎに、蔣介石の立場が検討される。

(1) 汪精衛「国民革命之意義」（一九二五・九・六）―『汪精衛集』、第三巻、一九三〇、上海、六六―六七頁。
(2) 「中国国民党第一次全国代表大会宣言」（一九二四・一）―『中国国民党宣言彙刊』、一九二八、上海、五八頁。
(3) 右同、五五頁。
(4) 「中国国民党第二次全国代表大会宣言」（一九二六・一）―『中国国民党宣言彙刊』、一七七頁。
(5) 汪精衛「国民革命之意義」、六六頁。
(6) 右同、六六―六七頁。
(7) 汪精衛「我們怎様実行三民主義」（一九二六・四）―『汪精衛集』、第三巻、一三三頁。
(8) 汪精衛「広東人民今日応有之決心」（一九二五年後半）―『汪精衛先生演説集』、一九二五、一一五―一一六頁。
(9) 汪精衛「国民政府歓迎港僑懇親団汪精衛先生演説詞」（一九二五・一一）―『伍梯雲汪精衛陳公博先生演説詞』、一九二五、広州、三頁。
(10) 汪精衛「東征勝利即罷工勝利」（一九二五・九頃）―『汪精衛先生的文集』、第三巻、一九二九？、上海、一八〇―一八一頁。
(11) 右同、一八〇頁。
(12) 右同、一八一頁。
(13) 汪精衛「我們応該怎様的努力」（この著作の発表年月日は必ずしも明らかではない。共産派と非共産派との対立の解消に言及していることからして、一九二五年末から一九二六年前半にかけてのものと推定される）―『汪精衛先生的文集』、第一巻、一九二九？、上海、五七頁。
(14) 右同、六三―六五頁。
(15) 右同、六七頁。
(16) 汪精衛「悼廖仲愷同志勗諸同志」（一九二五・八・二二）―『汪精衛先生的文集』、第一巻、二〇九頁。
(17) 汪精衛「廖仲愷同志之人格与事業」（一九二五・八・三一）―『汪精衛先生的文集』、第一巻、二一九―二二〇頁。
(18) 『中国国民党第二次全国代表大会会議録』、一九二六、九四頁。
(19) 汪精衛「総理逝世一週年紀念大会訓話」（一九二六・三）―『汪精衛集』、第三巻、一一八―一一九頁。
(20) 汪精衛「在孫文主義学会演説詞」（一九二六・二・六）―『汪精衛先生的文集』、第一巻、一九八、二〇一頁。
(21) 汪精衛「国民会議国際問題草案」（一九二五・四）―『汪精衛集』、第二巻、一二五頁。
(22) 汪精衛「中国実業之救済方法」（一九二四・八）―『汪精衛集』、第三巻、一三頁。
(23) 汪精衛「国民会議国際問題草案」、一二二頁。
(24) 右同、一二四―一二五頁。
(25) 汪精衛「廖仲愷同志之人格与事業」、二一七頁。

(26) 汪精衛「対悟州市民演説詞」(一九二六)—『汪精衛先生的文集』、第三巻、一七二頁。
(27) 汪精衛「国民革命之意義」、六四頁。
(28) 汪精衛「革命的分子応有之決心」(一九二五・九・九)—『汪精衛先生的文集』、第一巻、六九頁。
(29) 汪精衛「対第三期同学畢業訓話」(一九二六・一・一七)—『汪精衛集』、第三巻、九二—九三頁。
(30) 汪精衛「廖仲愷同志之人格与事業」、二一八頁。
(31) 汪精衛「革命的分子応有之決心」、六九頁。
(32) 汪精衛「在陸軍軍官学校就党代表職演説辞」(一九二五・一〇・二)—『汪精衛先生的文集』、第一巻、一九二—一九五頁。
(33) 汪精衛「我們応該怎様的努力」、六四頁。
(34) 右同、六五—六六頁。

五

汪精衛との対比において、蔣介石の大衆の掌握の仕方をみてみると、蔣介石の立場は、革命運動に参加すべき諸階級、ならびに、革命運動におけるそれら相互の関係に対する関心の弱さによつて特徴づけられる。したがつて、この面からの蔣介石の発言は、非常に少く、かつ、一貫性を欠く。この時期の蔣介石の発言において、わずかに、「中国革命は、……完全に労農階級のために革命をおこなうのであり」、「大地主」、「資本家」に反対する、と述べられているにすぎない。[1] しかし、その反面、蔣介石は、「大資本、大生産機関は、すべて外国人の手中にあるために、本国の産業は圧迫され、発達できない。本党の一切の主張は、……本国資本を発達させることである。……もし、本党の主張を実行できたら、まず最初に直接利益を得るのは、すなわち商界である」、と主張している。[2] 蔣介石は、ここで、帝国主義の圧迫に対して民族資本を支持しているにもかかわらず、国民革命運動におけるこれら民族資本家階級と労農階級との関係に関心を示していないのである。

むしろ、蔣介石の大衆に対する態度は、彼の軍人としての地位と密接に関連していた。「軍閥は、……人民と利害が相反

するがゆえに、人民の助力を得られないばかりでなく、人民のはげしい反対にあう」ことを強調しつつ、[3]蔣介石は、第一次東征、楊希閔、劉震寰軍の広州からの排除、第二次東征の勝利の一端を「人民」の支持に帰し、この軍事作戦中の人民との接触の経験から、「愛護人民」の必要性を機会あるごとに主張したのである。[4]ここでいう「愛護人民」とは、「兵士・人夫を強制徴用してはならないこと」、「強制徴税してはならないこと」、[5]人夫をなぐらないこと、[6]「人民を混乱におとし入れないこと」、「人民の自治への援助」、「各種団体を組織し、人民に自衛力をもたせること」、[7]等の諸要素からなつていた。いうまでもなく、蔣介石は自ら大衆運動の組織化に乗り出すことはなかつた。軍人としての蔣介石が大衆運動に接し得たのは、軍事作戦の過程で各地を転戦するときであつた。その場合に接する大衆とは、軍事作戦を側面的に援助する力であるとともに、軍隊の保護の対象であつたのである。先に列挙した「愛護人民」とは、まさに、日常生活レヴェルにおける、軍隊の大衆に対する保護の諸政策に他ならなかつた。蔣介石は、自らの権威の執行を保障する力の基礎として軍事力をもつていたがゆえに、基本的には、大衆運動の力に依存する感覚をもたなかつたのである。人民大衆が軍隊の保護の対象であるかぎり、大衆の内容にかんして充分な注意を払う必要がなかつたのである。したがつて、中共が大衆運動の組織者であり、汪精衛が統合者であるとするなら、蔣介石の役割は、保護者のそれであつたといえる。ここから大衆運動の組織者たる中共に対する蔣介石の態度が生れてくる。

蔣介石の中共に対する態度は、一九二六年一月を境として変化する。一九二五年中は、汪精衛と同じく、蔣介石も孫文の説明によりつつ、「三民主義は国家社会主義であり、また、広義の社会主義ともいえる。……社会主義のなかには、共産主義、集産主義があり、いわゆる共産・集産主義は、すべて三民主義の一部分である」、と述べている。[8]しかるに、「共産主義は、物質を歴史の中心とするが、われわれの三民主義は、民生を歴史の中心とする」、[9]という点において両者は異る。しかし、「物質を歴史の中心とする」共産主義は、「無産階級のために奮闘する」。このことは、換言すれば、「人類の生活を解

決し、社会の生存を謀る」ことであり、『民生問題』に他ならない。[10] かかる論法の妥当性はさておいて、いわゆる共産主義と民生主義との間に共通点を見出そうとする蔣介石の姿勢がここに見られるのである。蔣介石のこの容共的態度は、西山会議の開催とその主張に対する反論として書かれた、彼の書簡のなかに明確にあらわれている。㈠孫文は、すでに、「民生主義は、すなわち共産主義であると明言しており」、共産党が国民党に参加しても、衝突をひきおこすものではない。㈡「総理の自ら創造された三民主義は、たしかに共産主義とは同じでないが、革命の主義であるということは同じである」。共産主義を包括して、はじめて真の三民主義となり、共産党を包括して、はじめて真の国民党になるのである。[11]

蔣介石の容共的態度は一九二六年に入ると変化してくる。蔣介石は、一月に軍校内の左右の対立に言及している。「『孫文主義学会』と『青年軍人連合会』の発起の最初の趣旨は、もともと大へん好いものであつた。……(しかし)のちに、事にあたつた人が幼稚で、もつぱら感情のままに仕事をしたので、大へんまずくなつてしまつたのである」。[12] かくて、左右の対立の存在を承認した蔣介石は、中山艦事件を契機として、反共的態度を鮮明にしたのである。中山艦事件直後の演説のなかで、蔣介石はつぎのように主張する。「国民党は三民主義を基礎とする。共産分子が国民党に加入したのは、現在中国革命が必要とするのは、三民主義であることを認めたからである。……もしも、国民党の三民主義を看板にして、裏で共産主義の工作をするなら、三民主義を破壊するばかりでなく、……国民党に加入した本来の意義を完全になくしてしまう」。[13] かくて、現在の中国革命の必要性から、共産主義の工作の実行を禁止する蔣介石は、中共の現実の行動に非難の的を向ける。すなわち、「共産分子は、本党と本軍内にあり、一つの団体のなかで二つの主義をもつており、もともと、多くの矛盾した点の生れるのは免れえなかつた」。かかる矛盾は、青年軍人連合会等の「幼稚分子」によつてひきおこされたのである。[14] さらに、蔣介石は、中山艦事件当時、第一軍内に、少数ではあるが強い団結力をもつた共産分子が存在し、他の勢力を抑圧していた、[15] と指摘することによつて、党内における中共の専横の例を示そうとしている。

最後に、蔣介石のソ連に対する態度を検討するにあたつて、まず、彼の帝国主義のとらえ方から始めることとしよう。この点にかんして、蔣介石の考え方は、汪精衛のそれに大きな類似性を示す。すなわち、「帝国主義国内で、本当に政権を掌握しているのは、少数資本家の特殊階級にすぎず、最大多数の無産階級は、一様に苦しみを受けている」。「帝国主義は、相互間で、常に祖国保衛というでたらめによつて、その国内の無産階級を欺瞞し、かれらを資本主義の植民地争奪・市場争奪の帝国主義戦争の犠牲者にしている」。このようにして、「帝国主義は、資本主義が最高の程度まで発展したために、経済恐慌を生み出し、植民地・次植民地に対して搾取と圧迫をおこなわざるをえなく」なるのである。(16)

つぎに、帝国主義の中国侵略の性質にかんして、蔣介石は、武力侵略の苦痛は、「容易に感知される」が、経済侵略の苦痛は、「容易に感知されない」がゆえに、経済侵略の重大性を強調している。(17) 帝国主義の中国侵略の形態について、蔣介石は、つぎのように述べている。「われわれの革命のスローガン」は、「打倒帝国主義、打倒軍閥」である。しかるに、「軍閥は帝国主義から生れた」ものである。したがつて、「対内的に軍閥を打倒しようとすれば、まずはじめに、対外的に帝国主義を打倒しなければならない」。(18) ここで、蔣介石は、中国における帝国主義と軍閥との結合を確認する。事実、一九二五年五月の広州帰還は、「反革命的軍閥唐継続」、「北洋軍閥段祺瑞」、「假革命的軍閥楊希閔、劉震寰」から、革命根拠地を守るためであつた。(19) また、沙基惨案以前、帝国主義は、「経済上、武力上」「われわれを無形のうちに圧迫」したが、現在は、「武力でわれわれを圧迫し」、「経済でわれわれを封鎖」しようとしている。(20) さらに、廖仲愷の暗殺も、かかる「帝国主義と反革命派」との強化された結託の背景のなかで理解される。(21)

かかる帝国主義の認識のうえにたつて、蔣介石は、連ソ政策について、つぎの三点を確認する。㈠「中国の敵は、国際帝国主義者である。ロシアの敵も帝国主義者である。かくて、中ソの敵はともに一つである。」㈡「ロシアの現在の政策は、世界の被圧迫階級と被圧迫民族の解放をおこなうことである。本党の党綱と政綱も、世界の被圧迫階級と被圧迫民族の解放を

おこなうことにある。」㈢「ロシアは、中国革命の立脚点において、三民主義が中国の救国救民の根本主義であることを承認した」、というのがそれである。しかし、蔣介石は、その現実性を否定しつつも、ロシアが今日われわれを助けるのは、以前日英の帝国主義者が中国革命を援助したのと同じく、別に下心があつたり、あるいは、「ソヴィエト・ロシアが、将来、また、旧いロシアの政策を復活し、赤色帝国主義者となつてしまうなら、……われわれは、やはり、世界の被圧迫階級と被圧迫民族と連合して、それを打倒しなければならない」、と述べていることは注目される。[22] すなわち、蔣介石は、ここで、㈠ソ連は、中国において、マルクス主義ではなく、三民主義を支持すべきこと、㈡ソ連は、帝国主義者のごとき下心をもつて中国革命を援助しないこと、㈢ソ連は、将来赤色帝国主義に変つてしまうべきでないこと、の三つの留保条件をつけたうえで連ソ政策を支持しているのである。連ソ政策を支持するにあたつて、蔣介石は、これらの留保条件をつけることによつて、より自由であろうとしたし、事実自由でありえた。引用した蔣介石の演説が、すでにロシア人顧問との間で円滑なコミュニケーションを欠きつつあつたと思われる一月一〇日のものであつたという事実は、連ソ政策にかんする蔣介石と汪精衛との意見の相違の存在を示唆していると解することができるのである。

ロシア革命の国内的側面にかんする蔣介石の関心は、汪精衛のそれと異る。蔣介石は、中国革命の失敗と対比しつつ、ロシア革命成功の諸要因を列挙する。党の厳重な紀律と組織、党の命令への服従、党の紀律の遵守、主義の理解、および個人の自由の犠牲がそれである。[23] この評価は、一九二五年四月のものであるが、中山艦事件以後、中共、ソ連との関係が悪化した一九二六年四月の時点においても、蔣介石の評価には変わりがなかつた。すなわち、「現在の世界で党の組織と党の紀律のもつともよいもので、ロシア共産党に過ぎるものはない。その組織は完全に集中的であり、統一的である。その紀律は、非常に厳格で、細密である」、と蔣介石は述べている。[24] さらに、党にかぎらず、ソ連の軍隊についても、蔣介石は同様な評価をしていることは、言を待たない。[25] 以上のことから、蔣介石のロシア革命の国内的側面への関心は、革命政権の性格とそ

れへ参加する諸階級についてよりも、むしろ、革命党と革命軍の組織、紀律という側面についてのものであつた、ということがわかる。多くは語つていないが、蔣介石のロシア革命の国内的側面の評価について、いま一つ注目すべき点は、ソ連共産党と大衆との関係にかんする彼の理解である。「数年前、ロシアには飢饉があり、人々が食べるパンがなかつたところ、彼等党員のパンをまず人民に与えて食べさせた。人民が衣服をもつていないと、彼等はまず衣服を人民に与えて着せた。人民がたき木に困り、たくまきがないと、彼等党員は、自ら行つて、まきを切り、人民にたかせていた。道路に大変きたないところがあり、掃除夫が掃除をしなければ、彼等は自ら行つて清潔に掃除をした」ことを、蔣介石は賞讃している。[26] このことは、蔣介石のロシア革命の国内的側面に対する関心が、日常レヴェルにおける大衆の保護にあつたことを示しており、前段においては、軍の指導者としての関心から、蔣介石はロシア革命における党・軍の紀律と組織に目をむけていたことになる。ここに、大衆運動の保護者としての蔣介石の視角が貫かれているのを見ることができるのである。

(1) 蔣介石「歓宴第一帥第三帥官長訓話」（一九二五・一二・一八）―『蔣介石先生演説集』、第三集、一九二九、上海、三八頁。
(2) 蔣介石「汕頭各団体祝捷大会講話」（一九二五・一一・一六）―『蔣介石先生演説集』、第三集、一二―一三頁。
(3) 蔣介石「在軍事委員会講演」（一九二五・八）―『蔣介石先生演説集』、第二集、一九二九、上海、一〇九頁。
(4) 例えば、蔣介石「集合第一帥第二第三両団訓話」（一九二五・一一・一〇）―『蔣介石先生演説集』、第三集、五頁。
(5) 蔣介石「対党軍及警衛軍全体官兵訓話」（一九二五・六・三）―『蔣介石先生演説集』、第二集、四七頁。
(6) 蔣介石「対第一二縦隊官長訓話」（一九二五・六・七）―『蔣介石先生演説集』、第二集、五〇頁。
(7) 蔣介石「集合第一帥第二第三両団訓話」、一―二頁。
(8) 蔣介石「対第三期入伍生第三次訓話」（一九二五・四・九）―『蔣介石先生演説集』、第三集、六七頁。
(9) 蔣介石「第二期学生畢業訓話(一)」（一九二五・九・八）―『蔣介石先生演説集』、第二集、一四一頁。
(10) 蔣介石「対第三期入伍生第三次訓話」、六八頁。
(11) 蔣介石「対於西山会議告国民党同志書」（一九二五・一二・二五）―『蔣介石言論集』、一九二七、上海、二―三頁。
(12) 蔣介石「第三期学生畢業訓話(四)」（一九二六・一・一六）―『蔣介石先生演説集』、第三集、八三―八四頁。

(13) 蔣介石「宴会全体党代表訓話」(一九二六・四)—『蔣介石先生演説集』、第三集、一六四頁。
(14) 蔣介石「対官佐学生訓話(三)」(一九二六・四・九)—『蔣介石先生演説集』、第三集、一二二頁。
(15) 蔣介石「宴会全体党代表訓話」、一五七頁。
(16) 蔣介石「在軍事委員会講演」、一〇八、一一〇—一一一頁。
(17) 右同、一一四頁。
(18) 蔣介石「歓宴全国第二次代表及俄国同志演詞」(一九二六・一・一〇)—『蔣介石先生演説集』、第三集、四四頁。
(19) 蔣介石「対党軍及警衛軍全体官兵訓話」、四六頁。
(20) 蔣介石「沙基死難同志追悼会演講詞」(一九二五・八・四)—『蔣介石先生演説集』、第二集、一〇〇頁。
(21) 蔣介石「党軍追悼廖党代表訓話」(一九二五・九・九)—『蔣介石先生演説集』、第二集、一三一頁。
(22) 蔣介石「歓宴全国第二次代表及俄国同志演詞」、四六—四八頁。
(23) 蔣介石「対第三期入伍生第三次訓話」、六四頁。
(24) 蔣介石「対官佐学生訓話(三)」、一二六頁。
(25) 蔣介石「歓宴広州商会代表演説詞」(一九二五・九・三)—『蔣介石先生演説集』、第二集、一二八頁。
(26) 蔣介石「対第三期入伍生第三次訓話」、六五頁。

六

中国革命を抑圧している最大かつ最も基本的勢力は帝国主義であり、反帝国主義の線上で、中国革命はロシア革命と共通の利害関係をもつという点において、汪精衛と蔣介石は一致する。大衆の掌握の仕方が両者の分岐点となる。大衆運動の統合者としての汪精衛は、中国の反帝国主義闘争における、労農階級の重要性を承認しつつも、労働者階級の指導性を承認することを回避する。大衆運動の保護者としての蔣介石は、反帝国主義闘争に参加すべき大衆の内容とその相互関係に関心を示すことなく、日常的レヴェルにおける大衆の保護に関心を示す。自らの権威を執行するために、党機構に基盤をもつ大衆運動の統合者としての汪精衛は、大衆運動の組織者としての中共の力を必要としたのに反し、軍事力に基盤をもつ大衆運動

の保護者としての蔣介石は、大衆が単に保護の対象であるかぎり、基本的には、大衆運動の組織者としての中共の力を必要どしなかつた。このような認識から、党内で中共の影響力が増大したとき、汪精衛は親共に傾き、蔣介石は反共に傾いた。さらに、汪精衛と蔣介石は、各々、大衆運動の統合者と保護者の視角から、ロシア革命の国内的側面を評価する。かくて、国民党二全大会をめぐる、汪精衛と蔣介石の政治路線は、両者の大衆の掌握の仕方の相違を基礎として、展開していたのである。

（一九六九・九・二四）